

## はじめに

ウクライナ戦争の開戦から二年。ここ十数年のスパンで見て、この戦争ほど世界と日本の世論に衝撃を与えた戦争はないでしょう。

戦争といえばテロや内戦であり、国家が関わるのはせいぜいそれを口実とした介入だと思われるのに、国家が他国の領土に堂々と入ってくるのを久しぶりに体験することになりました。しかも、その様子が映像でリアルタイムに伝わってきますし、双方が相手の残虐さを世界に向けて宣伝しています。その結果、戦争の評価は別にして、日本でも少なくない国民が、戦争というものを他人事ひとごとではなく、自分のこととしてリアルに認識することになりました。そして、この戦争をどう捉えるべきか、アジアにどう影響するのか、日本にとっての教訓とは何かの議論を開始することになります。

その局面で「自衛隊を活いかす会」(代表〓柳澤協二、呼びかけ人〓伊勢崎賢治・加藤朗)は、戦争史に詳しい林吉永氏(元防衛研究所戦史部長)とともに、この難しい問題を議論することとなり

ました。開戦から一か月余の二〇二二年四月一日のことです。その成果は、『非戦の安全保障論—ウクライナ戦争以後の日本の戦略』（集英社新書、二〇二二年）として刊行されています。幸い好評を得て重版にもなりました。

しかし、書籍で何かを論じ、解明したところで、局面が変わるわけではありません。戦局は泥沼化する一方であり、戦死者の数は日に日にふくれ上がっていきます。それなのに戦争が終わる気配は一向に見えてきません。四人の著者は、誰かが明確な展望を持っているわけではないし、考え方も大きく違うのですが、「ウクライナ戦争をなんとかして終わらせなければならぬ」という点では共通の意思を持っています。そこで、二〇二三年九月二五日、再び集まってお侃々諤々かんかんがくの議論を行い、何らかのものを提示していこうとしたのが本書です。この議論の直後に、パレスチナのガザ地域における大規模な人道危機が発生し、戦争の終わらせ方を論じる必要性が、一層うきぼりになりました。

例によつて、著者ごとに問題の捉え方は異なります。一致するのはせいぜい、どんな時にも「非戦」の立場を貫かなければならないとか、そのためにも「戦争」とは何かを正確に認識しなければならぬとか、そんな程度にとどまるのかもしれない。けれども、ウクライナ戦争とガザ人道危機をめぐって世界と日本の世論が分裂している時には、そういう一致点が大事な

のではないでしようか。

「自衛隊を活かす会」(正式名称「自衛隊を活かす…21世紀の憲法と防衛を考える会」)は二〇一四年六月、九条を含む現行憲法下での自衛隊の在り方と日本の安全保障を考えることを目的に、過去の政治的な経験も考え方も多様なメンバーで発足しました。そもそも、九条と自衛隊・安全保障を両立させようとする目論見<sup>もくろみ</sup>自体が、分裂しているものを統合しようとする試みであって、複雑化する世界と日本の中でますます真価を発揮することが求められていると自負します。本書が多くの読者の目に触れることを期待しています。

二〇二三年一月

「自衛隊を活かす会」事務局長 松竹伸幸